

社会学者ブルードン

齊藤悦則

ブザンソンの街角で見たプラーク（銘板）では、「ブルードン、ソシオログ」と紹介されていたので、なるほどなど感心した思い出がある。日本で語られていたブルードンはもっぱら社会主義者だったからだ。あるいは、カテゴリーを広げても社会思想家とされるのが普通である。それを、ずばり社会学者と断ずるあたりがすごい。

たしかに、ブルードンの主著『貧困の哲学——経済における矛盾の体系』《邦訳、平凡社ライブラリー》を読むと、ブルードンを社会主義者のひとりに数えるのはなかなかむずかしいことがすぐにわかる。かれは社会主義、あるいは共産主義を容赦なく叩く。ブルードンは、社会経済にかかわる諸概念、諸項目について、その肯定面と否定面をともに必然的なものとして、いわばバランスよく紹介してみせるのに、「共有」（すなわち社会主義、あるいは共産主義）について語る章だけは、ほとんど否定面の列挙だ。つまり、叙述の体系的に乱れが生じている。ブルードンの思想を整理しようとする研究者が苦労させられる部分である。

その意味でも、ブルードンを社会主義者でなく社会学者としたほうが話はおさまりやすい。また、やはりわれわれが『貧困の哲学』の全体から受けとるのも、動くものとしての社会を丸ごとつかまえないというブルードンの意欲である。かれはデュルケムに先立って総合社会学の構築を企てたとも言えそう。もちろん、「社会学」ということばはまだない。『貧困の哲学』のなかでブルードンが用いたことばによれば、それは「社会経済学」である。しかし、社会をたんなる個の総和を超えた集合存在と見て、その独特の性質を明らかにしようとしたブルードンは、デュルケムの先駆者であり、かつまた別種のしかけで社会の変動を解明しようとした《りっぱな》社会学者だと言える。

『貧困の哲学』においては、社会を高みから俯瞰して全体を大きくつかまえるためのしかけが、「プロログ」で提示される「神の仮説」である。かれは「人間社会の動きを説明するために」「神のようなものがそこで働いていると想定」する。そうして社会変動の法則性を析出しようとする。

『貧困の哲学』のおもしろさは、社会変化の法則性・必然性に、人間の自由をひかえめに対置する点にある。ブルードンのばあい、人間は神にひれ伏すわけではないが、人間が神なのだと言い捨てて人間が一方向的に勝利するわけでもなく、また、神を殺すわけでもない。人間は神とぶつかりあい、ぶつかりあいながら前に進む。ぶつかりの手応えが生きる手応えなのである。これはわれわれが社会学を学ぶ態度と似ている。われわれは社会学を学ばば、社会の法則性のようなものを知るが、それはわれわれが社会に《あやつられている》たんなる人形にすぎないと自覚し、観念することではない。また、その法則を知っても、われわれはそれを自在に使って、《あるべき社会》を作り出せると思い上がってよいわけでもない。ブルードンに見られるこのつつまじやかな《おもしろがりかた》は、まさしく社会学者のそれだと言えるのではなかろうか。

じっさい、ブルードンを社会主義者たちと区別させ、ブルードンの思想の積極的な意義（今日性）を浮かび上がらせるためには、社会学者による研究が必要だったのである。フランスにおいてそれをおこなったのがギユルヴィッチであり、ピエール・アンサール先生（日仏社会学会の元フランス側代表）であった。日本においては作田啓一氏である。

京大人文研『プルドン研究』の功罪

京都大学人文科学研究所報告『プルドン研究』（1974年、岩波書店）は、日本におけるプルドン研究にとって画期的なものであった。それまでのプルドン研究がほとんどマルクスあるいはマルクス主義を準拠にしてきたのに対し、京大人文研『プルドン研究』はプルドンの《単体》としてのおもしろさを追求しようとする。

そして、その共同研究の共通分母、あるいはその基調となっているのが社会学者作田啓一氏の提示した「プルドンの社会理論」である。作田氏によるプルドンの集合力理論の解釈が、その他の研究者の論文のなかで、いわば金太郎飴のようにあらわれてくる。これがこの共同研究の特徴である。

プルドンによれば、人間の集合体は、個人の総和を上回る力（集合力）を生みだし、個の意識とは異なる意識（集合理性）をもつ。作田氏は、この集合力・集合理性の表出について、ギョルヴィッチの深層社会学をヒントに、それを階層的にとらえる。すなわち、社会の深層＝「現実の社会」*société réelle* と、社会の表層＝「公認の社会」*société officielle* の区分である。

対をなすこの用語はプルドンの『手帳』*Carnets* から抜き出されたもので、使い勝手がよく、しばしば護符的な効果さえ発揮する。プルドンは『手帳』のなかでこう書いている。

「公認の社会とは、われわれの目に見えているようなこの世界のことである。……現実の社会とは、絶対不動の法則にしたがって生き、成長しているこの社会のことである。この社会は、われわれが社会と呼んでいる一時的な膿のかさぶた *croûte* を、みずからの生命によって支えている」^(註1)

この区分によって、現実の社会こそ《ほんとうの》社会で、公認の社会は否定されるべき《かりそめの》社会と読まれてしまう。つまり、われわれの目の前にある社会は、現実の生きた集団から「疎外された超越的実体」なのだと作田氏は読む。この疎外の克服がプルドンの課題であった、とされる。

人間集団は、ものとかかわり、ひととかかわり、内面とかかわりにおいて、それぞれ現実の社会においては所有・政治・宗教を制度化した。これが第一次的な疎外形態である。そして、公認の社会においてはその疎外が深化して、資本・国家・教会が生まれた、という。わかりやすい疎外論的な解釈である。なかなか魅力的な解釈だが、わかりやすい分だけプルドンがやせほそって見える。

もちろん、プルドンのことばのなかに、そう読まれてもしかたない部分がある。すなわち、「公認の社会は、傾向としてますます消滅していき、現実の社会を純粹の輝きのもとで露わにさせる。この古いマスクの消滅は、われわれの目には進歩と見えるけれども、根本においては破壊にほかならない」^(註2)。

しかし、現実の社会と公認の社会の関係は、ヌメノン（物自体）と現象、本質と状態、サブスタンスとマチエール（質料）の関係にひとしい、とも言う^(註3)。どちらも、ものごとを説明するための道具立てにすぎない。このように読みとることのほうが、スピノザ風に「嘆かず、呪わず、ただ理解する」社会学者の態度にふさわしいような気がする。

とはいえ、作田氏の解釈による「現実の社会／公認の社会」の区分は、日本では今でも正しいプルドン解釈としてけっこうありがたく受け入れられている。

ギョルヴィッチからアンサーへ

いまでは社会学史のなかでしか語られなくなってしまった感のあるギョルヴィッチだが、かつてはフランス社会学の大物であった。そして、かれも自認するとおり、かれの想源のひとつがプルドンであったから、もしもギョルヴィッチの社会学が生命力・影響力を保っていたならば、今世紀、業界内で起こったいわゆるプルドン・ルネッサンスももう少し活発であったはずだ。

ギョルヴィッチはプルドンのなかに荒削りの深層社会学を見出した。すなわち、社会は形象として確認可能な表層から、個人や集団の心理生活に属する深層まで、いくつかの層をなしており、それらは相互に依存しあうとともに、相互に対立しあい、矛盾しあうというとらえ方である。ギョルヴィッチの見立てにおいては、社会の表層は深層の疎外形態というものではない。ましてや、深層が《善》で表層

は《悪》、というものではない。各層の内部の緊張・対立、そして諸層のあいだの緊張・対立が、社会の全体を変動させる。これらを「弁証法的に」解明することが、動くものとしての社会の総体的な把握につながる、とギョルヴィッチは考えた。

しかし、ギョルヴィッチによれば、プルドンは相対主義的な現実把握を志向しながら、社会を変化させる力を《底辺》に求めたがる「革命家」になってしまった。社会の深部にある創造的な力が、硬直した表層をうちやぶり、停滞した制度・構造をつきくずすと見るのは、なるほど「革命の社会学」の名にふさわしいが、それはプルドン本来の志向と矛盾するのではないか、とギョルヴィッチは考えた。

アンサール（敬称略）は、師匠にあたるギョルヴィッチのそういうプルドン観について、やや批判的な立場をとる。ギョルヴィッチは、自分の深層社会学の《高み》にまでプルドンは到達しきれなかったという形でプルドンの社会学を整理する。アンサールは、よりプルドンの思想に内在する形で、プルドンの思考の運動の把握をとおして、プルドンの社会学の全体像を浮かび上がらせようと努めた。

プルドンの方法論の解明から出発するのは、プルドンを理解するうえでなかなか効果的であった。プルドンの多数の著作をことごとくもちだすまでもなく、たとえば『貧困の哲学』ひとつをとっても、プルドンの発言はしばしば矛盾し、整合的に理解しがたく見える。そこから、読者・研究者ごとに多様なプルドン像が描き出される。これにたいしてアンサールは、まずプルドンの思考の内的メカニズムを明らかにすることによって、プルドン自身にも意識されなかったかもしれないその思想の体系性を明らかにしようとした。

アンサールがプルドンの方法論と見なしたのは、集合力理論・系列弁証法・イデオ＝リアリズム（理念＝現実論）である。集合力理論は、人間の集合体の独自の性格、生命体としての社会のダイナミズムを明らかにする。系列弁証法は、社会的現実の多元的な分割とその結合をつうじて、社会の総体的な把握に役立つ。理念＝現実論は、社会の深部にある集合体の意識と、社会の表層にある可視的な構造・制度との、緊張・相互連関をわれわれに気づかせる。神話や幻想が民衆をつきうごかし、社会を変化させていく、その力学が解明される。アンサールはこのように方法論を整理することによって、プルドンの社会学の《革命的な》性格をふたたびきわだたせた。

プルドンを味わう

プルドンのアクチュアリテ（今日性）をいうとき、アンサールはしばしば「自主管理型の社会主義」との近似性をあげる。私に言わせれば、これは後退である。アンサールは、プルドンをきれいに整理しすぎたために、プルドンの積極面を「革命性」に求めてしまった。

もちろん、それは社会の底辺層への共感を隠せないアンサールの人柄のせいでもある。また、社会学は何のための学問か、誰のための学問か、という（あの時代を知る人にとっては懐かしい）問いかけをまじめに受けとめたせいでもある。しかし、《あるべき社会》に向かって変革の作業におこなうプルドンは、そのかぎりにおいては、もはや魅力的な社会学者ではなくなる。

プルドンの魅力は「矛盾」にあった。かれは社会の矛盾を社会の活力と見、社会の生命である矛盾をそのままつかまえようとしたために、かれの叙述もしばしば矛盾したものになった。しかし、まさしくそのおかげで彼の「社会学」は、陰影に富んだ奥行きと凄みをそなえた「文学」に近いものとなっていく。

善をめざす人間のいとなみが重なりあえば悪に転じ、悪とされることが重なりあうと善に転ずる逆説的な流れ、それをプルドンはたくみに描き出す。つまり、かれは《読ませる》文筆家として、当時のひとびとに知られていた。われわれはその点をあらためて評価すべきである。

プルドンの文章力のすばらしさは、当時の一流の文芸批評家サント・ブーヴが評伝『プルドン』でたっぴりと証明してみせている^(注4)。また、プルドンファンを自認していたボードレーもプルドンの文章をこんなふうにはめる。「おそらく何かしらひそかな親近性のゆえにであろうが、優しさと

感激に満ちたプルードンのああいふ崇高なめりはり〔文のリズム〕が記憶に戻ってくる」(注5)。

プルードンの文章はロシアの文学者たち、たとえばトルストイ、そしてドストエフスキーをもしびれさせた(注6)。ゲルツェンによる賛辞はとくにすばらしい。「プルードンはカトリック的論争のすべての方法を身につけただけでなく、同様にヘーゲルの弁証法をも体得していた。……これらの武器を彼は、フランス語を自分の強靱で精力的な思想にふさわしいものに変えたように、自分流に作りかえ、鍛え上げたのである」(注7)。

現代のフランスにおいても、ジャック・ラカンは、結婚や恋愛といった事柄について「みなさんにプルードンを読まれることを薦めます」と言う。ラカンによれば、「彼は人間の条件についてほんの少し身を引いて考察し、一般に考えられているよりずっと手を焼かせると同時に繊細なこの事柄、つまり貞節に接近しようとしていました」(注8)(注9)。

つまり、プルードンの社会学は文学のように《おもしろい》のである。逆にいえば、プルードンの社会学は学問としてはなかなか習得しがたい。それはプルードンの語りが術というより芸であり、まねしがたい個性に属するからだ。プルードン主義者と言えるようなひとびとがあらわれにくいのもそのせいであるし、プルードンの提示する諸概念(系列やイデオ＝レアリズム)が社会学の道具としてなかなか使いにくいのもそのせいである。

ある意味では、ジンメル社会学に似ている。読む人が思わず膝をたたき、うなり、感心してしまう書き物は多いが、われわれがそこから用語や概念を借りて、自分もおもしろいことを書こうと思ってもできない。

われわれにとって、プルードンの社会学も、まずは読んでおもしろがるのが大事である。そして、社会のひだひだ、人間関係のひだひだに入りこみ、個人の意識や心理のゆらめきから社会の大きな変動まで自分の関心事とするような、そういう社会学者ならではの姿勢とまなざしを学びとりたい。

注

- 1) 書き込みの時期は『貧困の哲学』刊行の翌年1847年の終わり頃。Proudhon, *Carnets*, t.2, Marcel Rivière, 1961, p.272.
- 2) *ibid.*
- 3) *ibid.*, p.275
- 4) サント・ブーヴ『プルードン』、原幸雄訳、現代思潮社、1970年。
- 5) 『ボードレール全集』第2巻、阿部良雄訳、筑摩書房、1984年、29頁。
- 6) 『ドストエフスキー未公刊ノート』、小沼文彦訳、筑摩書房、1997年、33頁。
- 7) ゲルツェン『過去と思索』2、金子幸雄訳、筑摩書房、1999年、385頁。
- 8) ジャック・ラカン『フロイト理論と精神分析技法における自我』(下)小出浩之その他訳、岩波書店、1998年、146頁。
- 9) これらのプルードン賞賛については、関本洋司氏のブログを参照。